

■ IWJ 中継 9/6 (火) 11:00~12:00

さようなら原発一千万人署名市民の会による「『講演会 さようなら原発』 & 『さようなら原発全国集会』に関する記者会見」です

スピーカーは、左より鎌田慧さん、大江健三郎さん、落合恵子さん、宇都宮健児さん。

鎌田「今日急遽記者会見を開くのは、新政権が誕生し、脱原発の動きがトーンダウンしているから」

落合「9月3日、野田内閣の誕生が報道された。どうしても経済至上主義という言葉が耳を離れないが、原発をどうするという問いかけには『原発再稼動を進める。ただし老朽化したものは廃炉に。新設はしません』と答えた。これに対してふたつの疑問がある」

落合「ひとつめ。現に被爆し続けている人がいる現実を忘れてはいませんか。放射能について、乳幼児、胎児、被爆をし続けている。今現実には起きているその人たちの人権について答えていない。人の命を犠牲にして、経済優先にしてきませんでしたか」

落合「ふたつめの疑問。核のゴミを処理できる技術を人間として手にできていない。毎日ゴミは溜まっていく。処分の解決策は見えていない。なのに稼動し続けるのですか」

大江「311の後、ヨーロッパの報道をよく見てきた。すると、日本の反応と随分違う。福島原発の事故に対し、どんなに恐ろしいことが起こったかという反応。そういう反応が日本では、マスコミの皆さんの報道ではヨーロッパに対して小さい。その格差について考えてきた」

大江「広島長崎の原爆投下があり、戦争が終わった。そして憲法ができた。原爆投下を立法現実として。しかし今回、大きい、第三の原爆を自分たちの上に落としてしまったようだ。今と、広島長崎のあと戦争が終わったときのことをつなげて考えようと思う」

大江「原発の再稼動は止めなければいけないということに関して国民的な合意が必要。福島原発の大事故がもたらしている大きな事実、もう二度と起こさせないという立場に立って、法律をつくろうじゃないか。100年に2度目の立法現実と受け止めて、決意しよう」

宇都宮「政治的なイデオロギーの立場を乗り越えて連携していくというカタチが重要ではないかと思っている。残念ながら日本では労働運動、平和運動でさえ分かれてやってきた。この原発反対の運動こそ、イデオロギーを超えて市民が連携していくべきではないか」

鎌田「原発さようなら集会へは、アメリカ知識人からも連帯メッセージが寄せられている。ノーム・チョムスキー、ダニエル・エルスバーグ、デイヴィッド・クリーガー、ロバート・ジェイ・リフトン、メーティン・シャーウィン、リチャード・フォークといった人々」

落合「憲法と原発はつなげて考えなければいけないこと。差別のない社会をつくってきたつもりだが、今回の原発でも明らかに犠牲のシステムが見えてしまった。憲法を改めて大切に考えていかなければいけない」

大江「沖縄と福島。沖縄の市民運動は独特。米国、日本政府、沖縄の自治体にとって、解決策はまったく見つかっていない問題として普天間の問題はある。行き詰っているにもかかわらず、沖縄では大集会が行われ、それが政府を動かす。沖縄での運動は、市民の運動の模範」

大江「沖縄で大きな集会が実を結んでいるように、今回の、本土で行われる集会も、大きな力と意味を持つと思う。それを起こし、持続し、国家が無視できないほどにしていく。それが望みである」

落合さんが言及された、29日付け イギリスのインディペンデント紙について
<http://bit.ly/p2s3Lb>

鎌田「子どもたちや女性たちを犠牲にし、将来の子どもたちを犠牲にしている。そういう非モラル的な犠牲の上に、原発は成り立っている。皆さんもジャーナリストとして、日本の現状を変えるという心持ちで、この集会を扱ってください」